

1 自己評価の結果と改善方策

領域	自己評価の結果 (達成状況、結果の分析)	改善方策 (自己評価の結果を踏まえた課題・改善の方向)
学 校 経 営	(1) 安全・安心な学校 施設・設備の管理保全のため、安全点検を定期的に実施するとともに、避難訓練や講演会を実施し、生徒の危険予知能力、危機回避能力の育成に努めた。 「本校生徒は、身の周りにある危険に注意をはらって生活している」と回答した職員の割合は20%を下回っているが、生徒、保護者の割合はそれぞれ、66.0%、73.4%となっており、職員と生徒、保護者の感じ方に大きな開きがみられる。 「本校は、校内の環境美化に取り組んでいる」と回答した職員、保護者の割合は、それぞれ、93.5%、76.5%であり、「環境美化活動に熱心に取り組んでいる」と回答した生徒は35.6%である。 (2) 学校行事、部活動 「生徒は、学校行事に積極的に参加している」と回答した職員、保護者の割合はそれぞれ、70.9%、85.1%である。職員については、昨年度と比較すると30.9ポイント増加している。確かに、今年度の文化祭や体育祭等の生徒の活動状況はとてすばらしいものであった。「学校行事が楽しい」と回答した生徒の割合は56.4%にとどまっている。 「子どもを松戸向陽高校に入学させてよかった」と回答した保護者の割合は、昨年度より1ポイント減少し81.9%であり、「入学してよかった」と回答した生徒の割合は、4ポイント増加し61.8%であった。学科別にみると、入学させてよかったと回答した普通科保護者の割合は78.3%、福祉教養科は95.9%、また、入学してよかったと回答した普通科生徒の割合は60.1%、福祉教養科は71.1%という結果である。目的をもって入学した福祉教養科生徒、保護者の方が、普通科に比べ高い数値となっている。「生徒は、生き生きと学校生活を送っている」と回答した職員の割合は64.0%であった。 統合して部活動にも活気が出始め、試合等でも実績を残す部活動もでてきているが、「本校の部活動は活発である」と回答した職員の割合は24.2%であり、決して高い数値とはいえない。「生徒は、部活動に充実感を感じている」と回答した職員の割合は、昨年度より7.1ポイント減少し48.3%、保護者については、8.7ポイント増加し44.1%であった。生徒については、35.6ポイント増加し63.9%であったが、この問いの対象を部活動に加入した者に限定したためである。 (3) 情報発信 保護者、地域住民、受検生等に学校のような知らせるため、行事や学校の出来事等を、ホームページに掲載し、毎日更新することを心がけた。また、校長の考えを伝える校長ブログでも、積極的に情報発信に努めている。「本校は、学校の情報を保護者に積極的に伝えている」と回答した職員、保護者の割合はそれぞれ、96.7%、71.7%であり、職員については、昨年度より14.5ポイント増加している。 保護者向け、地域向けに、学期にそれぞれ4回程度、学校だよりを発行した。地域向けについては、町会長宅に届け、そこから各家へ配付していただいている。 管理職が、地域の行事や地区中学校長会等に積極的に参加し、教育実践の周知を図った。 (4) プリント等の配付・回収 「学校からもらったプリントをいつも保護者に渡している」と回答した生徒の割合が50%を	(1) 安全・安心な学校 「本校生徒は、身の周りにある危険に注意をはらって生活している」と回答した職員と生徒・保護者の割合に大きな開きがある。どのような部分が注意をはらっていないことになるのかについて、職員から生徒に示すべきである。 本校は環境美化に取り組んでおり、校内はとてもきれいである。今後も、清掃活動やボランティア活動をとおして、生徒の意識を高揚させたい。 (2) 学校行事、部活動 行事に対する生徒の取組を評価する職員が増加したが、行事を楽しんでいると回答している生徒の割合が低い。行事に対する取組のすばらしさを生徒に伝えることにより、生徒に自信をもたせたい。 生徒・保護者に、松戸向陽高校に入学してよかった、入学させてよかったと思えるような学校づくりを職員が一致団結して進めていく。そのためには、職員全体で、生徒の実態を把握し、本校生徒にあった、生徒指導、学習指導、進路指導を展開していく必要がある。 目標をもった福祉教養科生徒・保護者の肯定的な回答の割合が高いことは、普通科生徒への指導や関わり方についてのヒントを与えてくれている。進路面や学習面で生徒たちに刺激を与えながら、普通科生徒に目標をもたせたい。 部活動の活性化は、本校の今後の課題の一つである。アンケートの取り方によって、部活動の充実感に関する問いに対する回答の結果が正確なものになった。 (3) 情報発信 職員のほぼ全員が、本校が情報発信に努めていると考えている。今後も、更新頻度はいまのペースを維持することにより、ホームページ、校長ブログで相乗効果をあげていきたい。ホームページのスタイルが確立しつつあるので、組織的に運営していきたい。 今後も、学校だよりを配付することにより、本校のありのままのようすや生徒の活動等を積極的に伝え、保護者、地域の方々の理解を得ながら。連携して、本校生徒を育てていく。 今後も地域の行事に参加することにより、教育実践の周知を図っていく。 (4) プリント等の配付・回収 学校からの文書やプリントが、保護者のもとに届かず、保護者が知らなかったというケースが多

	下回っている。配付したプリント等は、ホームページに掲載し、ダウンロード可能な状態にしてある。 昨年度の学校評価（保護者用アンケート）の回収率は約 78 %であったが、今年度は 15 ポイント減少し、63 %であった（1 学年 52.5 %，2 学年 68.7 %，3 学年 66.9 %）。プリント等を保護者にしっかりと渡すこと、また、提出すべきものは、生徒にしっかりと提出させることを実現させたい。 「学校評価アンケートは学校長あて封筒などでの提出がよいのでは。」というご意見もいただいているので、平成 25 年度については検討したい。 (5) 研修の充実 不祥事防止に向け、モラルアップ委員会を活性化し、職員参加型の研修会を実施した。また、教育相談や学校評価、情報セキュリティ等の内容を扱った研修会を実施するなど、校内研修会は充実している。職員は皆、前向きに取り組んでいる。 5月14日（月）先生と生徒の距離（若手職員） 5月23日（水）千葉県暴力団排除条例に基づく青少年健全育成の措置 6月13日（水）パソコン研修会（若手職員） 7月6日（金）学習指導について 10月1日（月）不祥事防止に向けて 10月25日（木）教育相談 11月27日（火）情報セキュリティ 11月19日（月）学校評価（自己評価）について (6) PTA活動 PTA 活動にサポーター制度を導入したことにより、PTA 役員、理事以外の保護者が、学校行事に参加していただけるようになり、PTA 活動が活性化した。「サポーター制度の導入」というテーマで、松戸地区 PTA 研究大会で発表した。	い。配付文書をホームページに掲載することにより、少しは改善されたものの、実際にホームページを閲覧してくれる家庭では、きちんとプリントが届いているものと推察される。 学校評価アンケートの回収率が下がったことについては、我々職員は大いに反省しなければならない。集団としての生徒たちに対してではなく、生徒一人一人に話しかけ、呼びかけることが重要であることの共通理解を図りたい。 保護者が学校に対して多くの意見を書いていただけのようなアンケートの回収方法について検討していく。 (5) 研修の充実 職員にとって、研修会を行うことはとても重要であることはいうまでもない。本校では、職員の取組もよく、感想を読むと、研修がとても意味のあることがうかがえる。 次年度は、研修を設定する時期を検討する必要性を感じている。定期考査中は、問題作成や採点処理があり、職員が忙しいこと。また、福祉教養科は授業が設定されているため、福祉科職員は参加できないことがあるためである。 (6) PTA活動 サポーター制度を導入し、学校の教育活動に参加していただける保護者が増えたことはよろこばしいことであるが、まだスタートラインにたったにすぎない。活動がさらに活性化することにより、学校は変わる。
学 習 指 導	(1) 学び直し 普通科 1 年次の、英語、数学及び地理 A で学び直しを取り入れている。また、総合的な学習の時間にマナトレを導入している。やったらできたという手応えを感じさせるとともに、机に向かって集中し、自学自習の姿勢を身につけることを目的としている。 (2) 授業形態の工夫 多くの科目で少人数指導や TT を導入している。少人数だと、生徒一人一人に目が行き届き、きめ細かな学習指導を行うことができる。。 (3) 授業力の向上 授業練磨の公開日【授業公開（5月12日（土））、公開LHR（11月7日（水））、授業練磨の公開日（11月30日（金））】、東部地区小中学校との連携等により、授業をみせあう体制・環境づくりに努めた。初任者研修、5 年経験者研修とも絡めながら、各教科で研究授業を実施し、授業力の向上を図った。 「生徒は、授業に意欲的に取り組んでいる」と回答した職員の割合は、昨年度より 11.3 ポイント増加し 37.7 %となった。しかし、生徒は 59.7 %，保護者は 69.2 %であり、職員と生徒・保護者の感じ方に開きがみられる。学科別にみると、意欲的に取り組んでいると回答した割合は、生徒、保護者とも、福祉教養科が普通科を約 15 ポイント上回っている。 「学習習慣が身につくにつがある」と回答した割合は、昨年度と比べ、職員は 14.1 ポイント、生徒は 2.3 ポイント、保護者は 6.3 ポイント増加し、それぞれ、17.7 %，32.6 %，45.0 %という結果である。いずれも高い数値とはいえないが、職員と生徒・保護者の感じ方に開きがみられる。学科別にみると、学習習慣が身につくにつがあると回答した普通科生徒の割合は 31.0 %，福祉教養科生徒は 36.0，また普通科保護者は 41.2 %，福祉教養科保護者は 59.0 %となっている。	(1) 学び直し 「学び直し」を展開していることに対して、保護者の理解は得られている。ただ単に、学び直しを行うのではなく、本校生徒に何を教えたいのかを、各教科でさらに検討する必要がある。また、職員が、自分の教科だけではなく、学校として何を教え、卒業させていくのかの共通理解が必要である。 (2) 授業形態の工夫 今後も教室の数や職員の人数の許す限り、授業形態を工夫し、生徒にとってわかる授業を展開していく。 (3) 授業力の向上 公開授業は、教師の授業力を高めるために、とても有効なものである。また、同僚の授業をみたり、他校に出向き、授業参観することも大切なことである。本校で、公開授業を行った際、保護者にもっと来校してもらう手立てを考えたい。 生徒が学習意欲をもって授業に臨み、学習習慣を身につけ、学力を向上させることは、本校の大きな課題である。生徒の授業への取組、学習習慣、学力の定着度について、肯定的に考える職員の割合が増加しつつある。職員と生徒・保護者の割合に開きがあることについて分析が必要である。また、普通科生徒・保護者に比べ、肯定的にとらえている福祉教養科生徒・保護者の割合が高いことのは、取りりも直さず、目的意識の違いである。普通科生徒にいかにも目的意識をもたせることができるかがポイントであり、課題といえる。

	「学力は向上しつつある」と回答した職員の割合は、昨年度より 17.6 ポイント増加し 46.7 % であり、生徒、保護者はそれぞれ、40.7 %、52.1 %であった。学科別にみると、普通科と福祉教養科で、生徒の割合はほとんど差はないが、学力が向上しつつあると回答した福祉教養科保護者の割合が普通科を約 10 ポイント上回っている。 「本校の職員は、教材や指導方法を工夫し、わかりやすい授業を行っている」と回答した職員の割合は 95.1 %であるが、保護者は 68.1 %、生徒は 42.2 %であり、職員、生徒、保護者で感じ方に開きがみられる。わかりやすい授業を行っている」と回答した普通科保護者は 64.2 %、福祉教養科保護者は 83.5 %となっている。 生徒用アンケートの18～20は、今年度新設した問いである。「板書された文字は読みやすい」と回答した生徒は51.1%、「先生の声は聞きやすく、話のスピードは適切である」は52.1%、「説明内容は理解しやすい」は42.4%である。	工夫したわかりやすい授業について、職員と生徒のギャップが激しい。ギャップについて真剣に考えることが重要であり、ギャップを埋めるためには、職員が、生徒の実態を把握し、生徒にあった授業展開を進める必要がある。 この結果は、ある程度参考にはなるが、本来、このようにまとめた形ではなく、教科ごとに個別に聞くべき問いと考える。今後、授業評価アンケートの在り方について検討したい。
生徒指導	(1) 頭髪・服装等の指導 登下校時やホームルーム、授業時に整容（頭髪・服装）指導、遅刻指導、交通安全指導を行うとともに、ルール・マナーを守る指導を行った。 「本校は、ルール・マナーを守る指導をしっかりと行っている」と回答した職員の割合は 88.7 %、保護者は 73.0 %である。また、「ルール・マナーを守るよう心がけている」と回答した生徒は 79.0 %である。 「本校は、整容指導をしっかりと行っている」と回答した職員の割合は、昨年度に比べ、7.8 ポイント増加し、92.0 %であり、保護者は 74.7 %であった。また、「遅刻をしないよう心がけている」と回答した生徒は 72.8 %である。 「本校は、遅刻指導をしっかりと行っている」と回答した職員の割合は 87.1 %、保護者は 83.2 %である。また、「遅刻をしないように心がけている」と回答した生徒は 78.3 %である。1学期の遅刻の回数のトータルは 2866 回（1年生 449、2年生 1152、3年生 1265）、2学期に入ってから2学期の中間までの約2ヶ月弱の期間では 2848 回（1年生 710、2年生 842、3年生 1296）と、ほぼ1学期のトータルに並んでしまっている。遅刻をする生徒は固定化しつつある。遅刻をしないように心がけていると回答しなかった約 20 %の生徒を、家庭と連携しながら、どうにか改善させたい。 (2) 保護者と連携した指導 サポーター制度を導入したことにより、多くの保護者に協力いただき、職員と連携した登下校指導を行った。授業のようすや登下校の状況を保護者にみてもらうことは、とても重要なことである。 (3) 教育相談体制の充実 教育相談（生徒理解）の研修会を充実させるとともに、定期的な個人面談の実施と、スクールカウンセラー、養護教諭、学級担任等、連携した教育相談体制の充実を図った。 「本校は、生徒が相談しやすい雰囲気がある」と回答した職員の割合は、昨年度と比べ11.2ポイント減少し71.0%であった。また、保護者は昨年度とほとんど変化はなく61.4%であった。 「困ったときに相談できる先生がいる」と回答した生徒は38.0%にとどまっている。職員と生徒の感じ方に大きな開きがみられる。 「本校の職員は、生徒一人一人をよく理解するよう努めている」と回答した職員、生徒、保護者の割合はそれぞれ、93.4%、36.5%、69.1%であり、職員と生徒で感じ方に大きな開きがみられる。	(1) 頭髪・服装等の指導 本校で行っているルール・マナーを守る指導、整容指導、遅刻指導については、ほとんどの職員は、しっかりと指導をしていると考えており、保護者の理解も得られている結果がでている。また、生徒の多くは、守るよう心がけていると回答している。保護者から出された貴重なご意見にしっかりと耳を傾けながら、今後の生徒指導を展開していきたい。 (2) 保護者と連携した指導 保護者の協力なしに、教育活動は成り立たない。サポーター制度の導入により、登下校指導等に参加していただき、生徒のようすをみてもらう機会ができてきたことはよろこばしいことである。 (3) 教育相談体制の充実 職員は、本校は相談しやすい雰囲気があると考えているが、生徒はそう考えていない。生徒一人一人に目を向けながら、教育相談委員を周知するとともに、定期的な面談週間の設定など、相談しやすい、相談できる校内体制を整備したい 職員が生徒一人一人を理解するよう務めていると考えているが、生徒の多くはそうのように考えていない。我々職員は問題行動を起こす生徒の背景を理解しようとする努力や、反抗的な言動を繰り返す生徒への言葉がけや指導の方法も工夫し、柔軟に対応することも学ぶ必要がある。

キャリア教育	(1) 組織的・計画的な進路指導 3年間を見通した進路計画を立て、それにしたがって、学年別に進路説明会等を行っている。 「生徒は、進路実現のために努力している」と回答した職員は、昨年度と比べ、11.1ポイント減少し21.0%であった。保護者は5.3ポイント増加し61.5%、生徒は8.7ポイント増加し58.1%である。学年別にみると、努力していると回答した1年生は57.7%、2年生は47.6%、3年生は70.5%、また学科別みると、普通科生徒は56.3%、福祉教養科は68.4%である。 2年生が低い割合となっていること、また福祉教養科生徒の方が高くなっていることは、昨年度も同様であった。 ホームページ等を活用し、本校の進路指導のようすを知らしめているところである。 「本校の進路指導は充実している」と回答した保護者の割合は66.7%であり、昨年と比べ、2.3ポイント増加している。生徒については、9.4ポイント増加したものの、45.6%にとどまっている。職員は88.8%であり、生徒の感じ方と大きな開きがみられる。	(1) 組織的・計画的な進路指導 「みえる進路、あきらめない進路」をモットーに、しっかりと3年間の進路計画を立て、きめ細かなキャリア教育を行っているところである。 現在のところ、進路決定率が90%弱であり、これは、進路指導部を中心に、職員が生徒と向き合いながら、指導してきたたまものである。 今後、本校生徒が進路実現できるよう、しっかりと基礎学力を身につけさせていく。また、生活管理・健康管理の意識を保護者にも生徒にも持たせ、欠席や遅刻を減らし、学校を中心にした生活を送ることを徹底して指導する必要がある。 生徒が、どのような面で進路指導が充実していないと考えるのかについて、つきつめていく必要がある。
その他	(1) 福祉マインドの育成 昨年9月に立ち上がったボランティアセンターが機能し、ボランティア部、JRC部が活性化している。月1回、みかん通信を全生徒に配付し、ボランティア活動を案内している。もともと福祉教養科生徒はボランティア活動に前向きであるが、普通科生徒も積極的にボランティア活動に参加するようになりつつある。 昨年度の絵本研究部のボランティア・スピリット賞(アワード)コミュニティ賞に続き、ボランティア部の活動が同ブロック賞を受賞した。 昨年度に続き、2年次の家庭科の授業で「赤ちゃんとのふれあい体験授業」を実施した。生徒の取組もよく、参加した赤ちゃんの保護者の感想も「やってよかった」というものがほとんどである。異年齢交流をすることで、命の大切さを体感し、将来的な親力向上につながる。そして、それはそのまま福祉マインドの育成につながっているものと考ええる。 今後も魅力ある行事を企画し、実施していく。 (2) 福祉教養科の充実 教育内容を充実させ、モチベーションを維持させる工夫をしながら、長期休業中の対策授業、対策模試の受験(年4回)を行うことにより、平成23年度の介護福祉士国家試験の合格率は86.5%と好成績を修めることができた。平成24年度もさらに合格率が上がるよう、始業前朝学習等を実施している。 また、介護福祉士を目指す本校教育の現状を理解してもらうため、授業や介護実習報告会等を広く公開し、積極的な情報発信に努めている。 3年間で60日を超す介護実習がスムーズに行われるよう、地域の施設の担当者を招き、介護実習についての綿密な打合せを行った。 定期的な学科集会や介護実習報告会、福祉教養科全生徒が活動する場面を設定することにより、よき伝統を引き継ぐとともに、学年の枠を越えた絆をつくっている。 福祉教養科全学年生徒保護者に対して、保護者会を行うことにより、教育活動について説明し、理解と協力を得ながら、連携して生徒を育てている。 福祉教養科生徒は、産業教育フェア、こども祭り、体験入学等で、一般の方や中学生の、車いす試乗体験や点字体験を手伝っている。 特別支援学校に在籍する障害のある児童生徒と年に数回交流の場をもっている。この活動により、平成24年度のライトブルー少年賞を受賞することとなった。	(1) 福祉マインドの育成 ボランティア活動を充実させることは、福祉マインドを育成することにつながる。今後、普通科生徒にどれだけ広められるかが課題である。平成25年度入学生から、1年次に学ぶ「社会福祉基礎」、「道徳」をうまく絡め、活用していく。 本校は、現在、さまざまな行事をおこなっているが、今後も、さらに生徒にとって魅力ある行事を企画し、実施することにより、福祉マインドを育成していく。 (2) 福祉教養科の充実 平成25年度から、福祉教育拠点校となる本校にとって、福祉教養科の在り方(授業やさまざまな活動、国家試験合格率等)は、重要な鍵をにぎるものと思われる。積極的に情報発信し、地域や保護者の理解を得るとともに、普通科を含め、学校として福祉教育にあたっていく。